

東大見学会・大学訪問の感想文

① ディレクトフォース夏季プログラム

東大見学会の1日目の午前中、霞が関ビル35階でディレクトフォース夏季プログラムが行われ、近藤玄大さんと3人の方々のお話をお聞きすることができました。今回のテーマは「世界のグローバル化の中で、どう備えたら良いか？」です。

まず初めに、近藤玄大さんから基調講演がありました。近藤さんは、気軽な選択肢としての義手「handiii」を手掛けている方です。義手はもともと150万円ほどで、手を隠すものとしての位置付けだったそうです。しかし、3Dプリンターなどの新しい技術を用いることでコストを抑え、4万円ほどの安くてカッコいい義手の実現可能だそうです。近藤さんは、義手そのものに電話やICカードの機能を取り入れたり、アクセサリとして使える義手を作ったりする試みも行っており、すごく素晴らしいと思いました。これからの近藤さんの発明にも注目していきたいです。

グループセッションの一人目は、遠藤恭一さんでした。遠藤さんは「複眼思考」について話してくださいました。まず初めに、私たちがよく知っている日本中心の地図と中国から見て日本が上にある地図を見せていただきました。すると、中国や韓国のすぐ近くに日本列島があり、南の方向へ下って行っても南西諸島が連なっています。大陸側の国が自由に動ける海は限られていて、太平洋に出ようとしても日本の島々の間を通らなければならないため、これらの国々の間で様々な問題が起こっているのだと分かりました。このことから、一つの見方だけでなく違う見方も考えてみる複眼思考の大切さを実感しました。また、違う方向からものを見られるようになるには海外へ行くことが一番であり、できるだけ早く行くべきだともおっしゃっており印象に残りました。それに加えて、外国人と日本人の考え方の違いや、本質を突く質問についても学ぶことができました。

二人目は、笹川平和財団で海洋政策推進や海洋環境保全に関するプロジェクトを担当されている角田智彦さんでした。角田さんは高校時代には主に勉強をしていたそうです。中でも高校3年生の夏はやりたいことを実現するために1日に12時間勉強していたとおっしゃっていました。この日の夜に話を伺った仙台二高OBの東大生も高校時代1日に12時間勉強されていた方が多かったため、私もこのくらい勉強できるようにしていきたいです。また、角田さんは東京大学と京都大学の両方を経験しており、両者の違いについても話していただきました。

三人目は、ブラジルに12年駐在され、社長をされている安達公一さんでした。安達さんは、利益を共有化し強いリーダーシップを発揮しなければならないのが社長だとおっしゃっていました。また、交渉する時には相手の話に耳を傾けて自分の意見との違いを理解した上で、論理的な思考で相手を説得することが必要であるともおっしゃっていました。相手の話に耳を傾ける

ことはどんな時でも大切なことだと思います。安達さんは、海外で苦勞したこととしてカルチャーショックを挙げていました。外国の人と話すときにはポイントを押さえることで筋違いを防ぐことができたそうです。

ディレクトフォースでは、講師一人につき20分しかお話をお聞きすることができなかったので残念でした。しかし、それぞれの方から自分の今後の学習や生活に役立てることができる質の高いお話を伺えたので充実した時間になりました。

② 田近研究室訪問

1日目の午後、東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻の田近英一教授のもとを訪れました。田近先生の本をあらかじめ2冊読んでいたため、どのような話を伺うことができるのかとてもワクワクしていました。

余談ですが、指定された理学部1号館7階732号室へ向かう途中に乗ったエレベーターに酸素濃度計が取り付けられていました。これは、研究施設ならではの設備だと感じました。



田近先生は、地球や惑星の表層環境がどのように形成されるのか、また、その進化、変動の仕方、これらと生命の誕生・進化・絶滅との関係について研究されています。

例えば、地球のように生命が生存することができるハビタブルな惑星について、スノーボールアース・イベントや天体衝突イベント、海洋無酸素イベントなどの大規模な地球環境変動についてなどです。

地球惑星科学は、現在明らかになっていることが物理などに比べて少なく、新しい発見が多いそうです。そのため、古い教科書が使えないという側面があるものの、非常にはげしい変動の中でも生命が存在する地球の環境や歴史を解明していける奥深い分野だと思います。

田近先生は研究者になった大きな理由は「なりゆき」だとおっしゃっていました。理学部では9割以上の方が大学院へ進むため、周りの人達の情報が有効だったそうです。やはり、周りの人の影響は大きいのだと改めて感じました。

また、田近先生が「頑張っていると自分の選択が正しいと思えるようになる」とおっしゃっていたことも心に残っています。どのような選択であっても、自分の置かれた立場で頑張ることが大切なのだと思います。

③ OB・OG との座談会

1日目の夜は、仙台二高 OB・OG との座談会がありました。この中で、多くの OB が共通して話されていたことが大きく3つあります。

一つ目は、高校時代に古文と英語の最低限の予習を欠かさずに行っていたということです。古文と英語は、単語を覚えたり読解力をつけたりするのに積み重ねが大切になってきます。そ

のため、これらの予習を欠かさずに行うことで、授業での理解度が高まり、知識を定着させることができるのだと思います。

二つ目は、眠いときや体調が優れないときには勉強をしないということです。眠いときに勉強をしてもほとんど身につかないとおっしゃっていました。私自身、眠いときには寝るように心がけていたので、これからも続けていきたいと思います。

三つ目は、大学生は時間の縛りが少ないため自由にできる時間が多く取れるということです。自由にできる時間が多ければ、その時間をサークル活動やアルバイト、自主学習に当てることができます。しかし、この時間をだらけ過ぎてしまうと良い結果にはつながりません。そうならないためにも、今から自主性や規則正しい生活を身につけていきたいです。

また、座談会の中で特に印象に残った言葉があります。「良い大学はなく、自分で良い大学にする」という言葉です。まさに、自分が行った大学の中でどうするかによって大学の良さが決まるのだと思いました。

④ FairWind 企画

2日目は東京大学キャンパス見学会でした。

まず、駒場キャンパスです。駒場キャンパスで印象に残っているのは、図書館の蔵書の多さです。図書館は、そこら辺の本屋には置いていないような種類の本があったり、勉強ができるスペースが確保されていたりととても充実していました。プレゼンテーションでは、現役東大生の話を聞いて、進路はさまざまな決め方があり、自分が頑張れそうな大学を選ぶことが大切なのだと思います。

次は、本郷キャンパスです。本郷キャンパスでは東大生との進路相談会が印象に残っています。お話をした東大生は高校時代、スキマ時間で単語を覚えたり、読み物をしたりすることが多かったとおっしゃっていました。また、問題集を徹底的に行うことで差をつけることができたともおっしゃっていました。東大生は、それぞれ自分に合った勉強法に取り組んでいました。私も、勉強法を工夫していきたいと思います。

⑤ 最後に

今回の研修でお世話になった笹川平和財団と講師の皆様、田近英一教授、仙台二高 OB・OGの皆様、FairWindの皆様にご心から感謝いたします。本当にありがとうございました。